

■神功皇后：北九州との関連性

敦賀の氣比（けひ）大社（福井県敦賀市）

都怒我阿羅斯等（つぬがあらしと）は、意富加羅国（オオカラノクニ）の王の子。

10代崇神天皇（御眞木入彦：阿波美馬の御間城家（姫）へ婿入り）に会うため、長門から若狭湾に迂回し、崇神没後、垂仁に会った後、加羅国に戻り、ミマキに因んで任那（みまな）国を作る。

敦賀の住民は、「尖った帽子の形をみて、角（つの）がある人」を「角鹿（つぬが）」と呼んだ。



<私見>：応神天皇の元の名は、伊奢沙（イザサ）別命。（⇒ **イザヤ神：イザナギの別系統**）

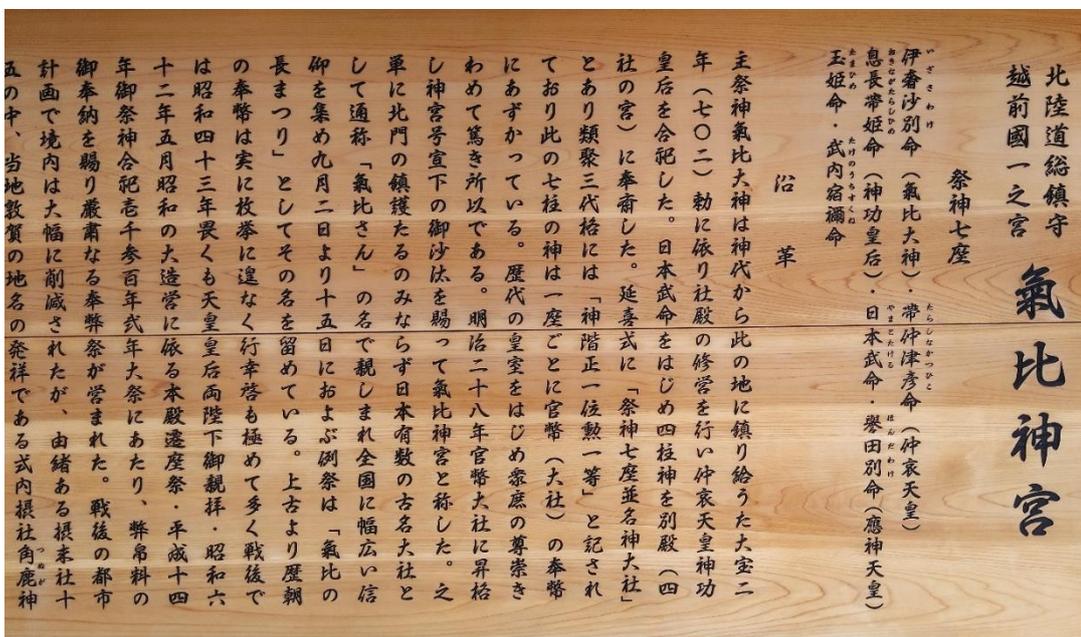
後に、氣比大社の祭神：菅田別と名前を交換し、出自を隠した。

神功皇后（息長帯姫）と武内宿禰は、敦賀から日本海側を回って、瀬戸内海から出発した仲哀天皇と長門（穴門）で合流し、筑紫（香椎宮）に移動した。

三韓征伐の名目で、新羅・辰韓に幽閉されていた秦一族の赤子（イザサ別命）を救出後、帰路の船で<身重の石>に見せかけて抱いたまま、**宇美（うみ）**に帰還。仲哀天皇の皇子としてこの地で育てた。

（※日本の伝承では、新羅の祖はBC60年頃、鵜草葺不合命の子の稲飯命（磐余彦の兄）とされる。）

成長した応神天皇は、百濟・新羅を従属させて、高句麗出兵を行い、高句麗の古都（集安）まで攻め上った。※「好太王碑」は、現在の北朝鮮と中国の国境：吉林省（鴨緑江の中流）にある。





月岡芳年筆「日本史略図会 第十五代神功皇后」

父は開化天皇玄孫・息長宿禰王で、母は渡来人の新羅王子天日矛（あめのひぼこ）裔・葛城高懸媛。弟に息長日子王、妹に虚空津比売、豊姫がいる。

「概略」

仲哀天皇 2 年、1 月に立后。天皇の熊襲征伐に随伴する。

仲哀天皇 9 年 2 月の天皇崩御に際して遺志を継ぎ、3 月に熊襲征伐を達成する。

同年 10 月、海を越えて新羅へ攻め込み百済、高麗をも服属させる（三韓征伐）。

同年 12 月、天皇の遺児である誉田別尊を出産。

翌年、誉田別尊の異母兄である香坂皇子、忍熊皇子を退けて凱旋帰国。皇后は皇太后摂政となり、誉田別尊を太子とした。誉田別尊が即位するまで政事を執り行い聖母（しょうも）とも呼ばれる。

明治時代までは一部史書で第 15 代天皇、初の女帝（女性天皇）とされていたが、大正 15(1926)年の皇統譜令（大正 15 年皇室令第 6 号）に基づく皇統譜より正式に歴代天皇から外された。摂政 69 年目に崩御。

- ・ 気長足姫尊（おきながたらしひめのみこと） - 『日本書紀』、和風諡号
- ・ 息長帯姫大神（おきながたらしひめのみこと） - 『古事記』
- ・ 大帯比売命（おおたらしひめのみこと） - 『古事記』
- ・ 大足姫命皇后 - 『続日本後紀』

漢風諡号である「神功皇后」は、代々の天皇と同様、奈良時代に淡海三船によって撰進された。

「熊襲征伐」

仲哀天皇 2 年 1 月 11 日に立后。2 月、天皇と共に角鹿の箭飯宮（けひのみや）へ。3 月、天皇が紀伊国の徳勒津宮（ところつのみや）に向かうが皇后は角鹿に留まる。同月、天皇が熊襲再叛の報を聞き親征開始。穴門で落ち合うよう連絡を受ける。7 月、穴門豊浦宮で天皇と合流。

仲哀天皇 8 年、天皇と共に筑紫檀日宮へ移動して神託を行い神懸った。託宣の内容は「熊襲の瘦せた国を攻めても意味はない、神に田と船を捧げて海を渡り金銀財宝のある新羅を攻めるべし」というものだった。天皇はこの神を信じず熊襲を攻めたが空しく敗走。

翌年 2 月に天皇が檀日宮（現・香椎宮）にて急死。『日本書紀』内の異伝や『天書紀』では熊襲の矢が当たったという。

3 月 1 日、小山田邑の斎宮で武内宿禰を審神者として再び神託を行い、前年に託宣した神が撞賢木巖之御魂天疎向津媛命（天照大神荒魂）、事代主神、住吉三神などであることを確認した。しかしひとまずは目の前の熊襲征伐を続行することとなり吉備鴨別を派遣して熊襲を従わせた。

3 月 17 日、皇后自ら松峽宮（福岡県筑前町）に移動し、20 日に層増岐野（そそきの）で羽白熊鷲という者を討った。そばの人に「熊鷲を取って心が安らかになった」と言われたので、そこを安（夜須）という。

3 月 25 日には筑後川下流域の山門県に移動して「田油津媛」という女酋を討ちとり、兄の夏羽は戦わずして逃げ出した。（この女酋「田油津姫」は邪馬台国女王の末裔とする説もある。）いずれにせよ最後まで抵抗していた九州北部もヤマト王権の支配下になり、ここにヤマト王権の全国制覇が完了したとされる。

「三韓征伐」

4月、松浦郡で誓約（うけい）を行った皇后は渡海遠征の成功を確信し、神田を作ったのちに橿日宮へ戻った。そして角髪を結って男装すると渡海遠征の全責任を負うことを宣言した。

9月には（筑紫夜須）にて大三輪神を祀り矛と刀を奉し船と兵を集めた。また草という海人を派遣して新羅までの道確かめさせた。さらに軍規を定めて略奪、婦女暴行、敵前逃亡などを禁じ、依網吾彦男垂見（よさみのあびこおたるみ）に航海の無事を祈らせた。

10月、お腹に子供（のちの応神天皇）を妊娠したまま筑紫から玄界灘を渡り朝鮮半島に出兵して新羅の国を攻めた。その勢いは船が山に登らんばかりだったという。新羅の王は「吾聞く、東に日本という神国有り。亦天皇という聖王あり。」と言い白旗を上げ、戦わずして降服し朝貢することを誓った。

皇后は宝物庫に入って地図と戸籍を手に入れ、また王宮の門に矛を突き立てて宗主権を誇示した。新羅王の波沙寐錦（はさむきん）は微叱己知（みしこち）という王族を人質に差し出し、さらに金・銀・絹を献上した。これを見た高句麗・百済も朝貢を約束した。

帰国した後の12月14日、皇后は筑紫で誉田別尊を出産した。出産した土地を「生み」から転じて「宇美」という。そして穴門の山田邑で住吉三神を祀った。

「忍熊王との戦い」

新羅を討った翌年2月、皇后は群臣を引き連れて穴門豊浦宮に移り天皇の殯を行った。そして畿内への帰途についた。しかし都には天皇の長男、次男である麿坂王、忍熊王がいた。彼らは誉田別尊の誕生を知り、皇后たちがこの赤子を君主（天皇、あるいは太子）に推し立ててくることを察した。そこで播磨の赤石に父の山陵を作ると称して拳兵、五十狭茅宿禰（いさちのすくね）に命じて東国から兵を集めさせた。そして菟餓野というところで「戦いに勝てるならば良い猪が捕れる」と誓約（うけい）の狩りを行った。ところが突然現れた獯猛な赤い猪に麿坂王は食い殺されてしまった。凶兆と理解した忍熊王は住吉まで撤退した。・・・（中略）・・・

忍熊王たちが待ち受けていることを知った皇后は、一旦紀伊に寄って誉田別尊を預けて北上。しかし紀淡海峡を突破できなかったため明石海峡を回って務古水門に到着。道中で天照大神、稚日女尊、事代主神、住吉三神を祀った後に進撃。忍熊王はまた撤退して山背の菟道に陣を敷き、ここが決戦の場となった。忍熊王方の熊之凝（くまのこり）という者が歌を詠み軍を鼓舞した。・・・（中略）・・・

皇后軍を率いる武内宿禰や武振熊命は一計を案じて偽りの和睦を申し出た。兵に命じて弓の弦を切らせ剣も捨てさせた。忍熊王がそれに応じて自軍にも同じようにさせると武内宿禰は再び号令し、兵に替えの弦と剣を取り出させた。予備の兵器など用意していなかった忍熊王は敗走した。武内宿禰は逢坂山を超えて狭々浪の栗林（滋賀県大津市膳所）まで追撃した。逃げ場のなくなった忍熊王は五十狭茅宿禰を呼びよせ歌を詠んだ。

忍熊王と五十狭茅宿禰は共に瀬田川へ入水し、遺体は後日になって引き上げられた。・・・（中略）・・・

同年10月、皇后は群臣に皇太后と認められた。この年が摂政元年（若井説によると西暦368年）である。

摂政2年11月8日、天皇を河内国長野陵に葬った。

摂政3年1月3日、誉田別尊を太子とし、磐余若桜宮に遷都。

摂政13年、2月に太子が武内宿禰に連れられて角鹿の筥飯大神に参拝。筥飯宮出発から始まった皇太后の遠征事業はここに終わり、酒宴が催された。

「新羅再征」

摂政5年3月7日、本国に一時帰国したいという微叱己知（新羅からの人質）の願いを聞き入れて葛城襲津彦を監視に付けるも逃がしてしまう。

摂政46年3月、斯摩宿禰を朝鮮半島の卓淳国（大邱）に派遣。斯摩宿禰はさらに百済へ使者を送り、百済から日本への道を繋いだ。

翌年4月、新羅と百済が朝貢してきた。百済の貢物が酷くみすぼらしいので使者の久弐を問い詰めたところ、新羅に貢物を奪われたと訴えた。

摂政49年、新羅を再征伐することになった。将軍として派遣された荒田別（あらたわけ）・鹿我別（かがわけ）は百済の木羅斤資（もくらこんし）・沙々奴跪（ささなこ）と共に七つの国を平定した。

以後、摂政52年まで久弐が日本と百済を往復し、百済から七支刀などの宝物をもたらした。七支刀は現在、奈良県天理市の石上神宮に保管されている。

摂政62年、新羅が朝貢してこないで葛城襲津彦に征伐させる。摂政69年、4月に崩御。

【年譜】：『日本書紀』の伝えるところによれば、以下のとおりである。

- 成務天皇40年 誕生
- 仲哀天皇2年 1月 皇后に立てられる
3月 天皇が熊襲を討つため親征を開始。
6月 天皇を追い角鹿から穴門の豊浦津に向かう
7月 豊浦津で海中から如意玉を拾う
- 仲哀天皇8年 1月 筑紫の檀日宮へ
9月 神がかり渡海遠征の奨励を託宣。天皇は無視して熊襲と闘い敗北
- 仲哀天皇9年 2月 天皇崩御。
3月 檀日宮から松峽宮へ。熊襲征伐を引継ぎ完遂
4月 火前国の松浦県で渡海遠征を宣言。檀日浦で神託を受け男装
9月 大三輪社を祭り挙兵
10月 和珥津から出発。新羅を屈服させ百済、高麗をも従える（三韓征伐）
12月 筑紫で譽田別尊を生む
- 神功摂政元年 2月 穴門の豊浦宮に移動して天皇の殯を行い、京へと向かう
3月 畿内で天皇の第二皇子忍熊王との戦争、勝利
10月 摂政に就任
- 神功摂政3年 1月 譽田別尊を太子に立て、磐余若桜宮に遷都
- 神功摂政5年 3月 新羅からの人質だった微叱己知が本国に逃げ帰る
- 神功摂政13年 2月 譽田別尊が武内宿禰と筭飯大神に参拝
- 神功摂政46年 3月 斯摩宿禰を卓淳国（大邱）に派遣。さらに斯摩が従者を百済の肖古王に派遣。
- 神功摂政47年 4月 新羅、百済の朝貢。百済の使者である久弐が新羅に貢物を奪われたと訴える
- 神功摂政49年 3月 久弐に荒田別を付けて新羅を征伐
- 神功摂政50年 2月 荒田別が復命
5月 千熊長彦に伴われて久弐が来朝
- 神功摂政51年 3月 百済の朝貢使として久弐が来朝
- 神功摂政52年 9月 久弐が来朝、七支刀一口・七子鏡一面・及び種々の重宝を献上
- 神功摂政62年 葛城襲津彦を派遣して新羅を征伐
- 神功摂政69年 4月 皇后崩御。享年は100歳（『古事記』も同じ）

<私見>神功皇后

神功皇后は、実際は摂政期間367年～390年(23年間)。書紀引き延ばしでは、3倍の69年間にして、摂政期間を西暦200年から269年(69年間)に充てた。(⇒日巫女の項へ記載済み)

年譜の摂政13年から46年まで(AD213～246)、倭人伝卑弥呼の33年間が空白期間である。通常は、有り得ない。

神功皇后は、天皇位には就いていない。譽田別命の摂政となっている。(※持統天皇の就任には疑問が残る。)